



補 僊

新選 漢語 彙編

坤

^ 5
6662



八五
6662

半日菴芳律編

潜 俳
新選東浪發句集五編

札坤
二冊

東京香同社藏梓

<2002-51>

新選年浪發句集五編

下の巻
中日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
一具庵身香閱

市街立秋

秋立——譯宜布葉葉も魚雲也 羽後 吟
のう戸に秋立の隣々う海—— 月 吟
新市に給水のり秋の立り江 斎 吟
人別々集秋の立り市の中 清 吟
深ひ葉も秋の立り市の中 清 吟
立秋やうかゝるる市の中 羽前 琴 柱



氷響る声 秋立好市 市中
 市中や人のももらに 秋の立
 賑やう子 秋の立らう 豊市場
 出雲た 秋の立らう 街の
 寺あり 所うら 在好町 秋
 秋立布 藝初らう 朝の町 東京
 輝た 十管の子 笠の都入
 市引け 静け 秋の立らう
 浪定ま 氷る夜に似て 星月夜 雨後
 空より 松風ひく 星月夜 洪山
 漁火も 眺中 浦の 星月夜 以存

星月夜

中々に 中初らう 星月夜
 月影を 清く 又星月夜 信濃
 空より 松風ひく 星月夜 相模
 賑やう 子 野も 風吹て 星月夜 雙松
 提灯を 清く 所ら 好星月夜 淇園
 月影を 又面を 星月夜 東京
 好勝を 出雲ら 在好町 星月夜 芳翁
 秋の 日 美濃
 秋の 日 上
 秋の 日 芳翁

秋日

秋の日の暮るるなり 行露なり 危
 以日の漁りもよ 秋日和 雨後 聽
 悔おりの土きり 善ね有磯海 月 泉
 秋の日の美 山の精り 以 存 静
 悔おりの乾きの早き 深の夜 洪 山 存
 山の隅り 短記秋の日 御 松 机 山 存
 秋の日の樹 庭きり 床 柱 眠 松 机 山 存
 美 秋の日のさす 楳 寸 芳 露 机 山 存
 さ 心日の立回 秋の日のさす 文 芳 礼 拜 芳 露 机 山 存
 秋の日とあも 伸多し 長糸瓜 文 芳 礼 拜 芳 露 机 山 存
 秋の夜や 笑う 相模 閑 美

秋の夜や 月をき 室も 暗うら 上 毛 玉
 悔おりの魚 跳て 七耳 子 泣心 歴 山 桂
 秋の夜や 嘆ゆゆ 垣の外 哉 琴 山 桂
 秋の夜や 露をなす れ 葉人 せ 葉る 雨 蘭 雨 琴 山 桂
 烟 精も 葉 倦 音 中 秋の 霜 華 以 蘭 雨 琴 山 桂
 降る 雨の 鳴る 秋の 夜 室 くれ 洪 園 孝 雨 琴 山 桂
 秋の夜を 承 とも せ 尺 田の 音 可 文 可 芳 園 孝 雨 琴 山 桂
 秋の 霜 多し 知らぬ 中 すす や 秋 葉 好 文 可 芳 園 孝 雨 琴 山 桂
 秋の 夜や 獨 あり 灯を たくす 芳 文 可 芳 園 孝 雨 琴 山 桂
 秋 室 雨 初 上 芳 文 可 芳 園 孝 雨 琴 山 桂
 悔おりの 夕 中 日 せ 中 悔おりの 初 上 芳 文 可 芳 園 孝 雨 琴 山 桂

秋の空 晴の殊なきつら 悔れそら 晴の空
 自の心とあれとも 秋乃空 停豫 里 聽 泉
 行その途やうき言 秋の空 周防 歳 年 燦
 澄切て水のやうき言 秋の空 上毛 法 泉
 晴るそとあつらふ言 秋の空 上毛 士 行 泉
 夜下もも雲みえそ 秋の空 才 嶽 琴 行 泉
 秋の空 差鞋解きそ 秋の空 才 嶽 琴 行 泉
 秋の空 簇鳴りして 秋の空 文 芳 才 嶽 琴 行 泉
 石の空 和むはらう 秋の空 文 禮 才 嶽 琴 行 泉
 秋の空 陸中 友 山
 隙上 一 子物の色や 秋の空 陸中 友 山

秋水

葉多し押たあそあり 秋の空 上毛 一 徹
 水多しも信もある 秋の空 武蔵 亀 齡
 流るるやそとらう 秋の空 信濃 逸 水
 細くもる魚のすそ 秋の空 芳 律 水

秋暑

秋暑 未だ忘らねば 扇 上毛 素 白
 秋暑 秋の暑うき言 多 我
 秋暑 秋の暑うき言 在 山
 秋暑 秋の暑うき言 近 山
 秋暑 秋の暑うき言 士 行 山
 秋暑 秋の暑うき言 庫 文 行 山
 秋暑 秋の暑うき言 呉 文 行 山

始し〜とて形重る 始の暑くうな
 赤の始も暑い事〜まよ山の色
 知れておの 帳の日敷の暑かき
 風名より 始の暑きとすれり
 暑けれ〜海名 始〜 晴きと記
 始あり〜 赤〜 無悟〜 赤〜 小禮
 是程〜 赤〜 始の暑くうん
 田の世赤〜 始〜 始の暑くう
 赤〜 暑〜 始の暑くうの 濡きと
 赤〜 暑〜 西風 始の暑くう
 着〜 赤〜 始の暑くうの 始の暑くう
 後 始
 落 山
 年
 一
 身
 雨
 山
 月
 本
 雙
 文
 芳
 為
 淇
 淇
 法
 月
 杏
 松
 一
 尚
 才
 芳
 為
 落
 山
 年

始す〜 赤〜 始の暑くう
 赤の始も暑い事〜まよ山の色
 知れておの 帳の日敷の暑かき
 風名より 始の暑きとすれり
 暑けれ〜海名 始〜 晴きと記
 始あり〜 赤〜 無悟〜 赤〜 小禮
 是程〜 赤〜 始の暑くうん
 田の世赤〜 始〜 始の暑くう
 赤〜 暑〜 始の暑くうの 濡きと
 赤〜 暑〜 西風 始の暑くう
 着〜 赤〜 始の暑くうの 始の暑くう
 後 始
 落 山
 年
 一
 身
 雨
 山
 月
 本
 雙
 文
 芳
 為
 淇
 淇
 法
 月
 杏
 松
 一
 尚
 才
 芳
 為
 落
 山
 年

木綿取

せくしはの香烟もも似や本物取
 うし乙日と照りれちうらよ本物取
 本物取や写事うらゆる家斗り
 文に文けまうきうり本物 烟
 本綿取や照鏡くりを差まうら
 山より来るゝと本物
 誘ひ合ふ隣 畠や本綿 取
 孝仲了子此を翻す本物
 行 ちき深まうきへ本物
 家内中へ出て本物もや門 畠
 もえうら吹風か 本物
 母の事知らずは子本物 本綿 取

上 上 相 上
 弦 弦 模 弦
 唯 一 白 青 雨 望 近 一 告 尚 芳
 月 鳥 水 圃 山 山 山 山 律

鹿 笛

鹿笛の試しうらやまぬらうち
 鹿笛七味とすまうら庵の隣
 鹿笛や風の聲うら近うら
 鹿笛を奏れうら泊り客
 まはらうら吹りうられす鹿 笛
 鹿笛や月影まうら油子法
 鹿笛の上を罷とらぬらうら
 鹿笛や林の奏れを吹りす
 鹿笛や吹近うら山家うら
 戸口うら鹿笛うける山家うら
 二款月と笛と知れうら近い鹿

上 上 相 上
 法 法 模 法
 唯 一 成 為 湛 清 柗 唯
 月 鳥 水 圃 山 山 山 山 律

下五

下六

廉笛の音きの針を凡も好し
菘笛を止むる如く歎うれて
鹿笛の上も人を信うせんり
あうくえのくくく妙を深免つ
廉笛や教く福と子の吹是く
蝟螂
鳩橋やふけも似す身の腕子
鳩螂の芥も甲斐なし鶴女唄
芥上々何工もらんい不出り
かまきりの意地や凡も身揃一才
鳩橋や芥よりする鈴ありし
鳩螂の吹うれて水も流れり

信濃

上毛

梅 洞 尺 律 芳 寸 俱 吳 浦
梅 白 琴 和 園 泉 年
一 嶽 淇 法 歲

鳩橋の徒まより向ふ車も
刈多し本好也まれそい不出り

東京

葦虫

葦虫のささる啼きも知られり
葦虫おちるや月影も憚り人
みの山に風も床の如く細きれ
葦虫やゆりくすれ霞もせん
この中や固すます能眠らねす
葦虫よおちのささるおちり
ささるささるの中ららん今の声
冬也
海もや露のまじりとうり

孤 芳 唯 俱 歷 素 雙 芳 文 幾
律 凡 園 山 白 松 律 禮 琴

下

あそび ひとの 廟もも 花のいさよふ
も子持の 袋の 動く 稲子とて
箕傳も 何れ 籠り 日和の 花の 中
鳥の 鳴き 立ち けり 鳥の 花の 中
竹に 立て 目 白ひ けり 花の 中
草の 花の 中 けり 花の 中
田の 中 行 けり 花の 中
馬の 花の 中 けり 花の 中
日 花の 中 けり 花の 中
都 市の 花の 中 けり 花の 中
田に 花の 中 けり 花の 中

文 歳 俱 逸 月 貞 一 法 弄 近 多
禮 年 園 齡 水 神 貴 音 去 山 山 我

神乞の 神もも ずか 稲子とて
鶉

鶉 中 花の 中 けり 花の 中
ひよこ 花の 中 けり 花の 中
鶉 花の 中 けり 花の 中
心 花の 中 けり 花の 中
鶉 花の 中 けり 花の 中
や 花の 中 けり 花の 中
鶉 花の 中 けり 花の 中
鶉 花の 中 けり 花の 中

稲 菴

芳 白 寸 一 以 玉 井 一 歳 芳
律 羊 芳 香 孝 蕉 月 和 年 山 律

二三羽をゆるして措きぬ稲雀
谷一鳴の声に立ちり移雀
秋を伴に舞うのもあるう稲雀
鳴るのやとや里くの稲雀
知れずとも移るや移雀
追々せぬ田うらも移るや
雀よふあへん稲雀を立つ羽音
穂穂を雀にきらん心と耕地

落穂

拾ひく牛におくく落穂の
泊りま借つひ拾て来落穂哉
落穂うけ阿闍梨の飛鳥也柱か

下九

豊さを知るや落穂もいと道
拾てくもあは落穂うけ
稲原もあはも拾う落穂うけ
神垣や落穂拾てはききき
年暮の役とて拾う落穂下葉
無算に添て拾ひ心落穂うけ
旅人の道もさくく落穂うけ
道も拾うく落穂もも馬矢
拾うも小海船も拾うおとるは
旅もくくも拾う落穂うけ
山さくも小粒も拾う落穂うけ
旅僧の拾うて来くも落穂哉

梧蘭油我士庫吳告白泊一
風雨枹琴行文官憲水如翁瓢

下九

大佛の石に上るる為矯るれ

崩築

音程も水も流れり崩築
枯川に溢る水やとられ築
鶉うまを築鶉の素も崩築
川中の磯に度々は築
瀬の現る月月の崩築
時とせつうお雨も崩築
崩築のつげやも崩築
面も月も崩築
玉川も枯やいさ崩築

秋声

芳 洪 史 玉 素 為 洪 月 松 芳
律 園 山 桂 泉 勒 山 約 札 律

下

奇る心も水も枯の声
松風も枯の声
川筋や柳も枯の声
夕暮や野宿も枯の声
枯の声
我病中も枯の声
蒼鷹も枯の声
水も耳も枯の声
枯も枯も枯の声
枯の声
暮とりも枯の声
知らずも枯の声

逸 吳 洪 一 歷 吳 嶽 仝 蘭 為 洪 嗔
水 雪 園 滅 山 羊 琴 雨 勒 山 風

松風と竹の響は秋の聲
計程の響も知る也 秋の聲
降れ安臥の響は山や秋の聲
おとくる響もある也 秋の聲
月よりさす大布の響 秋の聲
松松も年の高らむ 秋の聲

越後 一 稲
東京

昼中も竹の響はひさし 秋の響
竹の響は心の中 響く 秋の響
声清くは秋の響はあり 秋の響
秋の響は持てるもかたはる 秋の響
高へ響く竹の響は 秋の響
遠くより 響く 秋の響
竹の響は耳のたたく 秋の響
音子と免好竹の響は 秋の響
秋の響は竹の響は 秋の響
聞へる竹の響は 秋の響
名も響く竹の響は 秋の響
京の響は城野の竹の響は 秋の響

史素 嶽 聽 喙 文 芳 眠 江 一 稻
山 白 琴 泉 所 禮 律 露 左 瓢 洲

指打て竹の響は 秋の響
くも響く心の中 響く 秋の響
声清くは秋の響はあり 秋の響
秋の響は持てるもかたはる 秋の響
高へ響く竹の響は 秋の響
遠くより 響く 秋の響
竹の響は耳のたたく 秋の響
音子と免好竹の響は 秋の響
秋の響は竹の響は 秋の響
聞へる竹の響は 秋の響
名も響く竹の響は 秋の響
京の響は城野の竹の響は 秋の響

東京 武彦

芳 岡 一 松 存 亨 嶽 雙 洪 吉 在 吳
律 也 山 机 二 峰 岳 松 園 窓 台

秋山

人下りも高き山に秋の山
杉の影を付けて暮るも秋の山
磯山や秋の深き水うみ
眺むるもさきさき秋の山
吹風も秋の山に秋の山
夕暮るも秋の山に秋の山

秋海

月も出て星も入る秋の海
夕暮るも照る入日の色も秋の海
やの影もあつた秋の海

岩代 青 一 青 岡 吳 梧 唯
上 毛 青 一 青 岡 吳 梧 唯
娃 壱 青 一 青 岡 吳 梧 唯
山 山 山 山 山 山 山 山

とちて暮る秋の海
眼の果や只大空とあつた秋の海
月の出て星も入る秋の海
夕暮るも照る入日の色も秋の海
やの影もあつた秋の海

霜月神祇

狗もや湯立ちあつた夕月歌
神もあつた秋の山に秋の山
冬月や柏もあつた秋の山
玉垣や霜もあつた秋の山
官守の月もあつた秋の山
神護もあつた秋の山

相模

白 嘉 可 中 芳 月 松 吳 庫 琴 清
水 嶺 芳 峰 律 待 虬 羊 文 芳 泉

月影や揺るるる花影ささり
 月影 木の影をまわして神の前
 野社の影ならし ちと月えり
 月影を 押合ふ 人や 里 祭
 杉影も 尊紀 月の社を
 月すむや 白ひもほき 官柱
 空宿る 月の光りや 神の池
 官の灯はとろりと仕たり 月の海
 文守の掃深してある 月影は
 神垣を 月に心あすか
 月の蝕

友山 青山 蔭雨 素泉 以聽 一芳 寸香 芳香 唯風

中室子昇り工からる月の蝕
 月の蝕 檜の枝葉もたふさぐ
 吹く風は 吹きて 月影は
 蝕お月や 始のまてとまる 膝
 舞るといふ人も 舞あめ月の蝕
 ささりたる 小物舞き 秋半を月の蝕
 嘆むらせぬや ささる 月の蝕
 月の蝕も あも 舞ひ 止るまじり
 舞忘れ 了 憶り 月影は
 月影 蝕松の 声して 流るる
 為す 中にも あり 月影は
 人声の 響くや 月影の 蝕

月影 檜風 一山 洪香 明好 逸水 裁琴 淇園 青圃 士行 齋齋 約雨

東京

蝕果々を夜月の光りしを
村中のかゝるも暮きを月の他

秋待考

我廣北坊中流に喊りし一待考
友不_レ此秋よりしね待考
野の寺に待考中まの待盛
閑し_レる河に秋のい_レん_レな
香し_レる此秋よりし_レ待考
証の音止る候虫啼くい_レん_レが
流流の秋に待考中池の水
口癖の異なり_レ候_レ待考中
秋も子_レる_レに_レる_レ候_レ待考哉

一
三

文 禮
芳 拜

唯 風

梧 風

真 夢

赤 峰

公 燈

酒 梅

晴 月

玉 蕉

蘭 亭

信濃

伊豫

美如_レ編花_レ々々_レ葉の待考
寺岡も秋も押さくい_レん_レが
原られ_レ柿の重た_レ待考道
嵯峨寺に秋も待考の人出_レ
露に裾ぬらし_レても_レ待考
接ゆ_レ秋も_レ廣の待考_レが
芭蕉

芭蕉

い_レん_レが_レの_レ葉_レ々_レの_レ中_レの_レ芭蕉が
か_レ一_レ降_レる_レも_レ喜_レあ_レる_レと_レせ_レ知_レが
鈴_レの_レ時_レ々_レの_レ芭蕉_レの_レま_レう_レが
琴止_レる_レと_レ喜_レあ_レる_レと_レせ_レ知_レが
月_レの_レ光_レり_レを_レ流_レる_レと_レせ_レ知_レが

下 孫

東 京

成 路

蕪 鈴

才 芳

一 山

芳 子

芳 拜

旭 高

白 水

一 和

俱 園

左 園

下 孫

蕪心や芭蕉をたぐりぬの雨
 蕉のらに夜室の清きとせ細く
 傳ふらの心芭蕉よもれり
 杵も傳ふるや芭蕉の海一雨
 旅僧の夢より不む芭蕉うな
 芭蕉拙くする品。廣の小庭に
 月をて庭一杯のこせ細く
 葉のありし中と産む芭蕉の
 芭蕉葉や布魚のたぐりぬ
 吹あつて杵のたぐりぬ
 破れ水の中に玉巻く芭蕉の
 基のしるす灯の明る。とせ細く

芳文翁尚友法橋蘭素吟蕪
 琴禮百屯山会如雨白風琴雪

野 菊

腰に濁きとてとせ細く
 抱て出来ぬ持あれ野菊は
 悔れぬものも野菊も女を
 さしとらぬ日に香のたぐり
 傳ふるや人か野菊もたぐり

東京

一岡翁
 芳翁翁
 琴芽翁

紅 葉

戸口も傳林のせましくとせ細く
 紅葉してもも月たぐり野山に
 名も知らぬ叶も紅葉の勝るや
 川をくハ傳ふるの葉も紅葉
 名も知らぬ葉も紅葉の叶も

上毛

嶺五法杏洪
 琴山泉念園

白ぬの不二の楮野や 葉もくも
 下り色や 小石解るるの州紅葉
 紅葉して 杖さうけ 序も
 夕陽や 果もなき 序も紅葉
 際も立ちあふ 初より 州紅葉
 花もなき 葉もなき 果もなき 紅葉
 じやうに 雉も 楮 紅葉も
 熊谷の中 一や 紅葉 州紅葉
 子の目も 楮も 道も 紅葉も
 深山や 木のた あり 竹の葉も

楮の葉

掃葉せし木の葉に 交る 楮葉は

望 士 聽 一 蘭 中 古 文 芳 約 中 吳
 山 行 泉 雨 和 山 崎 篇 拜 禮 香

立ちあふ 楮の葉も 紅葉も 楮の葉も
 降膳を 室も 楮葉の ころれ 時
 第も 室も は 室も ころれ 楮葉も
 木の 楮に 翻れて も ある 葉の ころれ
 名も 知れぬ 名も 知れぬ 楮葉も
 室の 葉も 楮の 葉も 一里 楮
 いろん 木の 葉も 小石 解るる 紅葉も
 葉も なき 葉も なき 果も なき 紅葉も
 咲けぬ 木の 葉も 小石 解るる 楮葉も
 楮の 葉も 花も なき 葉も なき 果も なき 紅葉も
 花も なき 葉も なき 果も なき 紅葉も
 日漏るに 翻れて 白く 楮葉も

東京

歌 逸 青 齡 白 裁 以 月 一 葉 約 芳
 年 水 園 毒 水 琴 約 存 中 山 子 緯

下六

後の雛

春も孫あるも孫子孫の雛
春去りし言ふも心は雛
柳橋をくまふ雛
数あれは候きねの雛
仕来りし言ふも心は雛
雛も孫も秋は雛
竹も孫もあはれも雛
冬と名のつとも雛
内裏雛也
飾るももつとも雛
金庫も建ては雛

上七
唯 一 素 近 玉 一 呉 左 中
凡 山 菓 白 山 桂 穢 空 柳 峰

雛橋 秋は秋の飾りも
飾りも秋は秋の雛
雛也 秋を飾る雛
泊るも秋を飾る雛

雀入海為蛤

蛤と名つても海は雀
蛤と名つても海は雀
はまもくはなはな
蛤と名つても海は雀
蛤と名つても海は雀
蛤と名つても海は雀
蛤と名つても海は雀
蛤と名つても海は雀

淇 左 子 芳 蘭 杏 蔞 玉 蔞 中 白
園 子 律 亭 意 山 蕉 雨 峰 羊

貝のなる雀の鳴く声は秋の

秋 深

かきれ家や冬を隣りおら斗り
刈ありの葉山子や秋を深く
秋深く響くて奇麗な野山に
秋あり 虫は人鳴く如く重
悔原に 裾子つらなる 露の尖
秋深く響く響く 風は香
秋原に 野のまきく 草の香
秋もやあう 雲も赤色 山も
秋仕の 巾着 職人の所も秋原
秋原に 後撞く山の音くく

芳 律

蓬 琴 井 山 望 山 松 友 芳
宇 琴 月 山 山 山 山 山 山 山

御取越

山里を 他家とて なる 馬を越
馬を越 ほとと 嫁とて 渡さる
一心のよりのまなり 馬を越
畑仕の せも 馬を越 馬を越
是悟りて なる 馬を越 馬を越
日和ま なる 馬を越 馬を越
物との なる 馬を越 馬を越
手付とて 膳子 馬を越 馬を越
年と なる 膳子 馬を越 馬を越
隠居 同士の 膳子 馬を越 馬を越

東京

芳 蘭 吳 一 真 玉 一 洲 哉 吟
律 寺 重 知 松 蕉 城 麓 琴 風

御命講

美しき色も。候中は命清
けりたる園扇を靴や所命清
き他りの花も白く平河存清
四ッは下り出て行く連中も命清
美しき花も万燈也 命清
花舞のたこもせむる也 御命清
書き習ひ題目や命清
家もよき花も命清
女子も皆別仕舞人かつら
奢らざる世帯たのしみ 花汁
庖丁の美味も切れるも

廿五

命清

蘭亭 連我 芳山 可泉 聽泉 望山 士行 蘭亭

美しき色も。候中は命清
けりたる園扇を靴や所命清
き他りの花も白く平河存清
四ッは下り出て行く連中も命清
美しき花も万燈也 命清
花舞のたこもせむる也 御命清
書き習ひ題目や命清
家もよき花も命清
女子も皆別仕舞人かつら
奢らざる世帯たのしみ 花汁
庖丁の美味も切れるも

丁菜

青園 文禮 芳山 逸水 永山 聽泉 杏山 望山 近山

東京

日和より里に家多し 初茶
竹藪より茶にせし 清戸
色よりと書はし 茶より

冬の蠅

吹草場より 飛や 知らず冬の蠅
うらむとを吹 飛より 冬の蠅
客のあられや 行燈より 冬の蠅
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
羽帯おれり 飛より 冬の蠅
の茶煮る 煙りの 冬の蠅
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
雨より 飛や 障子に 日の白

明後

玉洲 芳 唯 弄 洪 蘭 法 聽 一 真
蕉 巖 舞 風 山 山 雨 泉 哉

茶釜より 日のさす 楊や 冬の蠅
よき 日和 竹 飛や 冬の蠅
飛や 一人を 相もや 冬の蠅
ちから へて ちから 冬の蠅
茶中 へす 小窓の 冬の蠅
憎めり 日和 冬の蠅
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
遊をゆく 日脚 冬の蠅
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
冬の蠅 飛や 障子に 日の白
化糖 冬の蠅

青山 明 連 公 逸 我 吳 琴 一 琴 一 昂
山 朝 雄 水 琴 菓 羊 我 減 芳 昂

飯煮たあとの蜜やふゆの蠟
日濁りて子守ふ其の冬は蠟
追つてみるもたすむらりその蠟
人についで日向よりやふゆの蠟
追へて羽の刺さぬはほり冬は蠟
喜具河の袖よりついで冬は蠟
雪よりも信目南る窓やうゆの蠟
馬小屋のるももはうゆの蠟
さし流りて冬や冬ん浮藻も
ちりも流りて置てやうて浮藻も
橋屋も人も怖れらるるも

可山 一山 菴山 物山 蘭亭 吳亭 洪亭 芳亭 弄山 真山 哉

船待りよの眺多しう浮藻も
余念も手浮藻の冬や堤尻
浮藻も折りて流れらるる
流れるとて流れは浮藻も
流るるも冬の流るるも
さし流りて冬や冬ん浮藻も
水も流るるも日向の浮藻も
昇るるも日向の流るるも
昔の葉も雪も冬も冬も
吹まててやうも入江の浮藻も
雪より日も流るるも浮藻も
人の世も冬も冬も流るるも

楮風 一風 可山 素山 我山 蘭亭 洪亭 芳亭 弄山 真山 哉

美ま〜月を柳〜浮葉香
好く〜玉露の床に浮葉香
浮葉香〜もを数と啼埋存せ

多味にゆた〜か〜好音の川
多味やはら〜其の中に
多味やむ〜あまぬ麦富
多味の音に響〜蒼う車
多味やから〜雪の空
多味や風も声〜あまぬ夕
多味のあ〜荒よ松は夏
多味や移〜家の夕煙

羽後盲人

可淇連明青奔月吟
芳園 妙柳峰豹風 文芳淇
禮緯園

多味や身を響〜あまぬい風
多味やあ〜い浮けぬ〜あまぬ

鷹鳥

多れ鷹〜声あ〜せ〜船うらも
鷹す〜あ〜は〜あ〜あ〜あ〜あ
鷹拵〜人の目た〜あ〜市の中
余の〜あ〜一羽も啼〜あ〜あ〜あ
飛鷹〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
鷹は外余の〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
鷹の脊に松〜あ〜あ〜あ〜あ
鷹〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

明近五歷我玉清月吟
妙山山山琴桂岳豹風 芳真
律松

鷹啼りて上風をす 江京
其れ鷹のまゝのひりては中松葉
鷹狩り 往年のとまる 徑う
人信そくなきは鷹の行儀か
其れ鷹のやいそくもせしと
鷹狩り 城の大鼓は響け
鳥のゆく鷹に鳴らす野風は
新とわい 鷹のやいそくもせしと
吹せし 梢の月中にほのぼの
鷹一羽啼きて晴りり 峯の雲
月の心で鷹の影をた 房のりり
木の石の如く 羽音を鷹のたひれなき

閑 美
吳 堂
可 山
松 山
法 泉
真 松
業 松
淇 松
全 松
文 禮

乃とてしよ且那目如の鷹野かな
夜興引
仕帯上膳待り風情なり夜興の犬
舩 犬のまきと知らぬ 夜興引
犬のものさすらゆる 夜興引
垣壁より 獲ぬとせらる 夜興引
芳れ音もとえに夜興の床より 犬
居酒屋に獲ぬ物持てまぬ夜興引
定たらぬ犬のまきと 夜興引
芳れ音もとえに 夜興かな
木 夜興引
森の影も 月夜に 寂かな

芳 琴
其 外
為 勃
調 梅
衆 身
杏 窓
白 羊
青 律
吳 羊

異やさし橋向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る

歴山 青柳 真哉 以孝 一机 蘭亭 吳雪 告憲 法泉 業雲

ふしつや月の澄む秋の気か
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る
異やさし川向らとて通る

冬川

風なりは流るる冬川
納涼の時はありに冬川
唯ふくくして冬川
ぬききつに眠る冬川
舟橋のさう冬川
氷る川 踏むの足音
下流より上流へ

可芳 尚千 芳律 月豹 弄山 荔山 琴芳 望山 一徹 全

冬の川水々二瀬よりありてふらり
飛さうな星の影あり冬川
石ころをれハ流れてうや川
長橋も半用な〜冬川
月もさして宿る衛もな〜冬川
玉川も寂ぬいよ〜冬川

冬田

ふる雪の中寒まんとする冬田か
冬田ハ乾き初けて眺る
路水膝あつたけにゆる冬田か
水も又休ませてもくゆる冬田か
あたらぬのさ〜冬田か

伊勢

豊前

閑

一

芳

山

吟

以

公

送

鶯

美

瓢

芳

山

風

泉

孝

雄

水

雪ふる日の美中〜冬田か
冬田ハ斜小は〜冬田か
ぬ〜冬田か
外梅は雪の舞する冬田か
冬田に道を〜冬田か

冬野

冬野や松の旭の〜冬野か
冬野や松の旭の〜冬野か
冬野や松の旭の〜冬野か
冬野や松の旭の〜冬野か
冬野や松の旭の〜冬野か
冬野や松の旭の〜冬野か

上毛

青我

晴月

葉雲

物翁

芳緯

哉琴

眩月

近山

一

一

青圃

下巻

只度る牛や冬夜の夕日暮
守て来い道と南らぬ冬夜の車
急い信もきき——冬夜を越す間
只一羽林——冬夜の夕日暮
山に雪海りして雨は冬夜のぬ
半に——冬夜の嵐より車
里の灯はとせても雪の冬夜の
冬夜のやとぬ所りの海と山
見えん所もきき——冬夜の一ツ家
冬夜のやとぬ所りの海と山
半夜の急い信もきき——冬夜の
眼たつものよとぬ所りの海と山

芳 荆
法 栲 蘭 松 蕪 李 一 晚 吳 左 淇 送
各 風 雨 雪 廿 川 夕 象 言 園 水

行と人けり風のまらける冬夜の
冬夜のやとぬ所りの海と山
冬夜の——冬夜の空り——
月の出てぬ海よりぬ夕日の空
冬夜の景色もきき——冬夜の物
花の咲く本もある——冬夜の空り
冬夜の空りもきき——冬夜の空
今日も又降る信もきき——冬夜の
冬夜の空りもきき——冬夜の
降るものもききぬ天のやとぬ空
眺免ての空りもきき——冬夜の

芳 荆
法 栲 蘭 松 蕪 李 一 晚 吳 左 淇 送
各 風 雨 雪 廿 川 夕 象 言 園 水

豆質厚くそそりてえり枇杷の花
 咲くも散るも急ぐらんいとく
 空をよみよみおのちもく枇杷の花
 家におもふ花もなれどいとく
 吹草もほろもりの長命の枇杷の花
 横さまにさすらんぬくいはのむ
 今日とりと盛るもせんむとく
 枇杷の香も金もあらぬぬ木戸
 日のさすてぬくも白の枇杷の花
 是程より咲て眼をけいといふ
 散らるも知らぬらん枇杷の花

吹草祭

弄 一 真 青 青 齡 寸 白 芳 文
 山 山 香 柳 圃 龜 芳 羊 拜 禮

人山や吹草 祭の鈴木門
 吹草場の壁沿うて祭の香
 是より子に多かる吹草 祭の香
 若やのや吹草 祭の源治の歌
 祭の香もさすらんぬく枇杷の花
 子の先より塵をたると吹草 祭の香
 吹草場の香もいとく 祭の香
 若子達も仕ゆて吹草 祭の香
 其の香もいとく庭の 大吹草
 眺るもいとく吹草 祭の蜜柑
 おもふて吹草 祭の香もいとく
 香もいとくや吹草 祭の 投蜜柑

木 弄 一 真 青 青 齡 寸 白 芳 文
 風 嶺 孝 勅 泉 柳 圃 翠 窓 憲 櫻 圃 青 圃

不意の来る客の吹草の音祭
祭る日に柳の音ある吹草の音
那泊町と知らるる吹草祭の音
吹草陽の子供にせよ 祭の日
早起の吹草祭の那泊屋町

鯨鯨

鯨鯨を切るものにほろろと
船付の足鯨鯨の 徳利
鯨鯨の 割り少なき 料理屑
鯨鯨の料理都合の 撒 又
あんなくらの音あひのや 鈴月歌
鯨鯨の 膳の 押し 箸 写し せん

琴 行 芳
士 琴 行
芳 琴 行
尺 琴 行
所 琴 行
玉 琴 行
玉 琴 行
月 琴 行

あんなくらの音あひのや 鈴月歌
鯨鯨の 膳の 押し 箸 写し せん
鯨鯨の 割り少なき 料理屑
鯨鯨の料理都合の 撒 又
あんなくらの音あひのや 鈴月歌
鯨鯨の 膳の 押し 箸 写し せん

牡蛎

汐風もい〜ぬ〜の 牡蛎拾ひ
牡蛎汁に皆食ふ 風呂盆
牡蛎の音あひのや 扇膚を 焚き
不意の来る客に牡蛎の音あひのや
交際して汐間行々 牡蛎拾ひ
牡蛎房の雄波雄浪の音あひのや 扇
牡蛎の音あひのや 後ろに音あひのや
牡蛎の音あひのや 荒日 和

全 尚 芳
全 尚 芳
尚 芳
尚 芳
尚 芳
尚 芳
尚 芳

御冠の夜に肥る気若の牡蛎
牡蛎のや海をうらに蒸る風
かきけや河極のうらを向けてら
温泉送上をさきす砥礪の風味哉

鱧

鱧の幼魚のれ
大声は今来しとら 鱧荷か子
昆布の香やゆき 鱧の吸加城
やう 鱧の魚
きく 鱧の教
鱧船やきと上高し 着く漢
引きまゝきや 鱧の地加城

寸 芳
文 鱧
鱧 鱧
鱧 鱧
鱧 鱧
鱧 鱧
鱧 鱧
鱧 鱧

鳥

鳥の声や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ
鳥の聲や多とはおももれ

芳 尚 紫 告 青 梧 喙
律 雲 中 窓 山 風 風
鱧 鱧 鱧 鱧 鱧 鱧 鱧 鱧

月の影も清く人さき梅
雪の如く月影の下や冬も花も
樹深きよ静れ日抱く冬も梅
松先よさすかのぬき 雪の梅
光よき月影 静れて冬も梅
昼よきの梅もさす 雪の梅

雪の連懐

意の斗りさ老のさす
隣接情心静く 雪の音
老の眼小くさす 雪の音
静られた静かきや 雪の音
よき年や雪の音 雪の音

歳 吳 聽 青 吟 芳 英 青 岡 春 嶽
琴 羊 泉 柳 風 律 仙 圃 美 女 年

家母も雪の音 雪の音
雪の音 雪の音 雪の音
老の音 雪の音 雪の音
秋年の老 雪の音 雪の音
家母も力なきん 雪の音

雪の音

雪の音 雪の音 雪の音
雪の音のあき 雪の音
雪の音や此れと身に 雪の音
雪の音や 雪の音 雪の音
雪の音を 雪の音 雪の音
雪の音を 雪の音 雪の音

寂 素 杏 淇 青 嶽 芳 初 冬 洲 玉
峰 泉 窓 園 圃 琴 律 情 曉 巖 桂

音声にまはらぐ世原 廣少路
舟それな音や度家の新と嵐
ぬら ぐ酒の通帳を音声に
歩つけ 音も笑ひとすり子
音声やけつとまはる池の鴨
うをお等の音声はるや硝子經

音声

音声や其家斗り持好灯歌
寒声や橋を隔りの行もり
音声や老を花をわら福好
音声や時を遠を人橋の上
寒声や強更 星の光る音

青柳 可芳 尚雲 芳芽 文禮 芳律

唯山 露我 貞豹 月丸 唯凡

音声や如御川 幽遊より
寒声は夜を忘る 音もり
月の如い音声 音もり
音声や夜毎 音もり
寒声や雪の積る音 音もり
音声や音もり 音もり
寒声や音もり 音もり

餅花

餅花の下竹を 音もり
餅花も凜と音せり 音もり
音出を音もり 音もり
餅花の月歌 音もり

寒琴 杏忘 葉雲 芳律

音歌 以存 餅花

おちたよのりくくありし庭家
梅也や枝のうりも傳美しき
餅たまたたかむり背中の子
もちをや朧の梅のうりもあ
餅をの墨の紅茶おろしうれ
もちをや心やしよしと家
餅をや一の家家せしとよし
餅をや灯籠の大ききと子
もちをよとせしとあしや毎の音
大梅の餅をよめ松の家
餅をや一の大黒柱幹して
もちをやともふきと古柱

清真 蘭雨 淇山 毒女 松洲 琴芳 玉蕉 一菓 寄山 东院 吴雪 寸芳

秀川 上毛

信濃

餅をよとせしとあしや毎の音

古曆

うらゝるゝと其のちや古曆
未ださきし用もあると古曆
ゆしてんをよとせしと古曆
もちをよとせしと古曆
借たのちも古曆
とや色しとすのちと古曆
ほや下にまねられと古曆
老より曆もあると古曆

年の終も只梅もつよ庵の岡

年の夜

芳琴 嶽琴 存梅 一月 文禮 芳琴 月約

不詳

昔の春の夜は来て年の暮は去り
年の夜は闇の明く浪の所
年の暮は毎き新やまきく
とりの夜は手廻りもはし撒持所
とりの人結らん年の一夜うれ
年の暮は可きわらうと籠り多
ないやう情ある年の暮はいと多
年の暮は永く無く人の心
年の夜は縁に同じくとりの敷
とりの暮や灯台細る物初
年の暮や縁にせし夜す豊か
暮は古の年の暮は縁にせし夜す豊か

青 為 本 真 望 晴 吳 松 素 青 如 東
川 勃 風 跡 山 月 羊 洲 白 山 風 曉

年の夜の暮くや星のくは接す
とりの暮は花や街のとも敷
年の暮は葉のうた梅を庭の端
年の夜は花の結び接する地
とりの暮は果のうた町の人通
年の夜のすさうも帰るれうな
年の暮は

青 約 淇 真 芳 吾 永 一
園 永 園 松 芳 岳 岳 誠

下

喇字之——煙管の年の名残を
 掛せり 柳の 名残の年、此處
 流れ温泉の煙、も年の名残に
 雪を掃く門も今年の名残に
 腰掛の清きも年の名残に
 風呂湯 為す音さ、年の名残に
 不世と云くも柳も年の名残に
 年々々 秋今更き——正名残に
 書切り——年々々 年の名残に
 多籠りとも——も年の名残に
 淀いとも、水もとも——の名残に
 大空に乾くも、年の名残に

川
 素
 為
 毒
 公
 逸
 一
 告
 奔

吟
 左
 素
 為
 毒
 公
 逸
 一
 告
 奔

風
 泉
 泉
 泉
 泉
 泉
 泉
 泉

年の夜は名残を——とて子より
 年近——年の名残の海——舟

文
 禮

四季文題 追加

雪の多し 乾きりり 風 日 和
 跡に心れ 安眠も ちのある 雲が
 香 盆より 裁せたる ありり 福寿草
 之を透して とも 空の 滝す 柳のれ
 有ふれた 秋も 昔なり 梅の月
 為椿拾く 葉の 舞の 舞のれりり
 梅の香も 今 蓋より—— 井の煙

東京
 逸
 風
 一
 風
 米
 君
 耕
 羽
 朗
 飄
 舟
 石
 雨

今日こそ六つてゆけおんちる橋
 善の風人の楫姫を吹より
 常やいとあつつに日のゆき
 和事所や暖簾の白く通る町
 善も未ださし一病後をさる衣
 京へ出てあつてもみられに善の毎
 知りぬるよ盛つるさるる藪の樹
 見古した山ももつらんさるる藪
 初をとりかへさるる人の心茶屋うま
 泳き日やあつてもさるるても念もさる
 実やうを教へて譲るさるるりかな
 沁る湯のりうり届くや福寿草

尾張 高 庵
 三河 高 香
 相撲 史 旋
 下 旭 舟 月
 上 晚 芳
 下 隣 舟
 加 東 舟
 岩 壯 洞
 代 山
 羽 香 稻
 後 月

菜の花色 今日の酒りも是まかせ
 揚りてあま地にもさるるを崔かな
 常に通るうてせまぬ山路了奈
 四五月も梅のちかむる月歌か
 歌を水に映る軽き舟花子月
 初蝶のちかむる日如續き亀

出を 柳 糸
 播 廣 鏡 弓
 傳 中 善 園
 紀 伊 唼 圃
 昔 家 晚 梨
 昔 及 丹 楓
 近 江 九 峰
 伊 勢 可 同
 紀 伊 唼 圃
 昔 家 晚 梨
 昔 及 丹 楓

正徳

降る中や響の目たたら田のまみ
閑子多啼とあはれハ鳴るもく
常々まゆりんと啼に不き人
空まの唇れ紫煙の如きとれ
冷汁や井の銭はあしるき
松新戸むし一枚 甚や家
旅も糸の安き縁起や縁時
の安き、新は補ひや新の雨
一輪より夜をぬ息く牡丹かな
妻の中やい圓扇もあうら表
是へ子おろきほめる糍うれ
涼風や二階をさか新協の糸

肥前 吾
考 丹
仙 甫
羽 香
上 香
上 月
下 芳
尾 芳
三 香
遠 十
江 湖
相 山
模 月

描むと久しきうは今日の新業
遊星を老人意し麻の子うれ
欄干にもくれなりみや橋納涼
年寄の程ものかくは 縁の事

困 菜
風 麓
融 水
尋 香

さし、るに琴一面や露の秋
彷彿とせし秋の深さやを
月より人衆のまさうもなかり危
人怨と共し更しく盆の月
後つきて世をみとせ危 稻 蒔
紐解つて初て縁 旅 系 鞋

三 河
上 毛
下 毛
信 濃
常 陸

素心

葉の香や 惜まらぬ 日の暮あき
よて来た馬を 走らす 角力取
心のもれ 腕あつらり 身を火
町へ出て 名を 号せん 草の地
船形や 五みあくれ 近江瀬
うしろから 月の 加ます 碇のち
考へて さるぬに 仕たり 月の門

羽后 香 香 月
香后 丹 楓
紀伊 喰 圃
相模 亦 月
東京 鳳 炭
文 禮

船形のもや 家もの 忘れ 驚かす
心の中を せぬけて 幸へ 度小路
雲のや 来た時 くらぬ 救の 勇

三河 石 芝
素 信
露 香

初きや 清り 埒なく 神の衣
山葉を や 雀の 這入る 勇仲 露
船き に 座掃て せぬ 小まのち
雲月や 地を 為つかぬ 下枝の 音
木も 見えぬ 都の 町に 扇葉の 風
名も なく 心も つ、に あり 月
初きや 柳の 景色の 十二分
水仙と 香り 儂たり 椽の 先
雲月や 燈り しくみ しく 松の 紙
菩提樹の 下陰 たる 光を 菅の 香
月を かくす 力も つきて 為 葉の 哉
有明の 消る 光り や 雲の 上

伊勢 社 樂
紀伊 松 年
香后 丹 楓
羽后 香 稻
露 月
上毛 晩 芳
下毛 弊 乞
常陸 樵 翁
素 心
信濃 逸 水

汗流

今ゆゑ景色やききの樟田
相模 舟 月
新巻の観してゆくや為山
東京 嵐
こゝへ来て分別も浮一年の関
芳 緯

人の来るも侍ながらりり
羽後 吟
上七 歳
芙蓉の花より新残る月
引際おきりり水の次そめて
たき、控は火おきく燭るなり
雪の小春控んでみれば雪の
肩廻ると馴しき、帰
琴風 琴風 琴風 琴風

老僧の佛ころの尊きよ
三夜お食に金山子味
若葉して濡れ家めきく面白
く温泉湯浴れ皆既痛忘
袖の下意の妻居よよく利て
痛 湯衣おきらい嬌り香
ころにきく空纏く音目数
針残りよりくく多き、故
おもいせに紙も継おく糊序
又ま開しりもの申あある
紙のしりりりりりりりりりり
紙を濡むよき先暖裁りり

琴風 琴風 琴風 琴風 琴風 琴風 琴風 琴風

東風がし吹きり道のばかきりて
 魚りもせねとも腹は最ふま時
 面倒な許沼海たるひよ安堵
 帛紗にあまゝ水引のほし
 橋梁まゝの敷いとんりほり
 わきからえれ紫ねさき鼻
 初まのわつお降とも海引と
 入替るも羽のまなみの海舟船
 あてはめられて新まきり用
 月の柿こしき深も早うぬけ
 祭りのも福宜の秋仕入りし

風琴風琴風琴風琴風琴風琴

鹿さりの連きふるよひのそりと
 こころは山ハこころなニま立
 豆よわをそと撒てぬたる時が笑
 津浪の海はみ半分もさ雲
 笑これ紫そこもかこも花はかり
 大戸の長閑所には暖

水仙のまらき蒼られ
 三何
 芳石
 芝律芝
 風琴風琴風琴風琴

押か付客も整りある人
名をかへて月宵に面を
河菰の啼に甜か臈を知る
ひやうきも一階をわきひら家
世をききぬ間をやめて居座
頬括てききぬ銀もおもひくは
音もききぬ一階をわきひら家
紙やかよび平の祝たをわけて
加茂の競馬おあまたは月
指折てえり十年を矢の如し
空達む現もさして命なり
油管陰賞銀のあつ浪り

律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律

五段長屋にみる徒士の流
おきよ音響もよかきく
ききぬとく遊い約束
二才
稚子舟も免符も我指場
禪沙の化導骨よこころ
さんは海へてうきききききき
川系涼みの灯かとり急
素浪りに口三味線のよい浦子
女房音もとりこころもとり
奇麗好わくも掛いしあ憐
糸瓜伝とくく水の配分
林ももききききききききき

律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律 芝 律

谷きまゝに記し 子に
 為人と悟らねうちら大なる之
 感一入はる 今のあるま
 右よりに計らねつゝい話して
 母樂橋子に冬も金何
 綿宜殿より送られたる白小袖
 朝日風の夢やしもある
 情の機嫌もなほ花の中
 忘るゝいぬ心流葉よ

芝 律 芝 律 芝 律 芝 律 芝

明治三十年八月十二日印刷
 同年同月十五日發行

東京豊多摩郡戸塚村七下戸塚四百壹番地
 編集者 大 館 兼 太 朗

印刷兼發行者 大 館 整 一

東京市日本橋區通三丁目
 發賣書林 小林 新兵衛

